



文●オリヴィエ・ボーフェイ
Text by Olivire Beaufrays

翻訳●熊井浩美
Translation by Hiromi Kumai

写真●アフロ
Photo by AFLO

近代カルチョのドン、ラッキー・ルチアーノ

~元ユヴェントスGM、ルチアーノ・モツジ物語~

元ユヴェントス・ゼネラルマネージャー・ルチアーノ・モツジがサッカー界に足を踏み入れたのは1970年代後半のこと。以降、イタリアサッカー界は“金・贈収賄・売春”にまみれた歴史を刻み始めることとなる。果たしてスキャンダルの主人公“モツジ”が歩んできた道のりとは、どんなものだったのか。

近代カルチョの世界を仕切る男は
マフィアさながらの権力さを持つ

四半世紀以上に渡り、ルチアーノ・モツジはイタリアサッカー界において最も大きな影響力を持つ人物の一人だった。また同時に、最も物議を醸す人物の一人でもある。ローマでもラツィオでも、トリノでもそしてユヴェントスでも……。

彼の立場のつながりについては、今までも一部から指摘されていた。しかし今回の調査で明らかになった事実から、彼の人脉はこの二つの組織をはるかに超えて広がっていたことが明らかになったのである。

振り返れば、彼の仕事には常に汚点がつきまといってきたのだ。

ローマのウルトラのリーダーでイタリアのソーセージにちなんでエルモルタデッラというあだ名で呼ばれるフアブリツィオ・カロッツィアをはじめ、ラ・ヌーヴェの記事を書くことをモツジに許されたジャーナリストの名前をほめかされた報道機関の編集者に至るまで、モツジはイタリアサッカー界に巨大なクモの巣を張り巡らせていたのである。

長年に渡ってイタリア有数の優秀なクラブ幹部とみなされてきたルチアーノ・モツジはその裏で別の顔を持っていた。いかかわしく影響力のある人物として、ひそかに物事を操るカルチョの黒幕として知られていたのだ。そしてそれは、実際にユヴェントスでのスキャンダルから明らかになった新事実によって証明されている。

「インタビュの中で彼を批判したその当日に、私は監督を辞めざるを得なくなりました」と語ったのは、元イタリア代表で指導者に転じたジャンカルロ・ピシネティだ。

ユヴェントスのゼネラルマネージャーという肩書きとマネーシメン

ト会社「GEAワールド」における彼の立場のつながりについては、今までも一部から指摘されていた。しかし今回の調査で明らかになった事実から、彼の人脉はこの二つの組織をはるかに超えて広がっていたことが明らかになったのである。

ていた。今回盗聴録音された会話の中でモツジは謎の相手に対して「フアブリツィオ・ミッコリは自分のおかげで代表キャップを得られたのだから、代表に選ばれ続けたいのなら今後は行儀良く振る舞うべきだ」と話しているのだ。

こんな話は序の口でモツジの権力はまさにボーダーレスだった。以下、その絶大な権力を示すいくつかを紹介しよう。

・モツジはユ・ヴェエの試合をある特定の審判に担当させることを望んでいた。これはそれほど難しいことではない。彼はいつも、2005年までサッカー協会で審判選定の責任者を務めていた、ヒェルルイジ・パイレットに電話していたのだから。

・検察官が、モツジの本業に関するある手がかりを追って調査しようとしたことがあった。モツジはそれに対して、協会の親しい友人に電話をかけてその検察官をクビにするよう頼んだ。

このように、その手口がコーザ

ノストラ、つまりマフィアによく似ているため、モツジは悪名高きイタリア系アメリカ人のマフィア最高幹部にちなみ、「ラッキー・ルチアーノ」というあだ名で呼ばれている。自分のあだ名をネタにしておだけてみせることすらあるのだ。

「移籍を交渉しているときはナイフを使いたいね。リボルバーでは音が大きすぎる」といふ謎めいた言葉さえ残している。彼の勢力はあまりにも大きいため、最近刊行された『ラッキー・ルチアーノ・カルチオのボスルチアーノ・モツジの陰謀と操作とスキャンダル』という本の著者は匿名を望んだほどである。

選手としてはアマチュアで終るも
スカウトとしてサッカー界に登場

では、モツジのような人物が、どうしてイタリアサッカー界でそこまで大きな権力を手にするようになったのだろうか。その答えを出すのが難しいのは、このような仕事の



今回のスキャンダルの中心人物ルチアーノ・モツジ。

が、もっとも重大な活動は、無料乗車券を利用してラツィオからトスカーナまでに散在するクラブとの人脉を築くことだった。

これは非常にうまくいった。彼のスカウトとしての資質は、後にかつてインテルのアンジェロ・モラッティ会長の下でゼネラルマネージャーを務めていたイタロ・アッロロ・ディの目にとまる。当時アッロロ・ディはユヴェントスで働き始めていたため、トリノの街でモツジはフランコ・カウジエノ・パオロ・ロッシ、クラウディオ・ジエン



モッジ(左)と昨シーズンまでユヴェントスを率いていたファビオ・カッペロ監督(中)、右はユヴェントスの取締役を務めていたジラウド。

ティレガエターノ・シリアなどユヴェントスのユニフォームを着て活躍する選手の発掘に携わったのである。しかしサッカー界でこれ以上出世するには駅長としての仕事が障害となった。70年代の終わり頃、イタリア国鉄はとうとう駅長の早期退職を正式に認めた。モッジはこの機会に飛びつき、わずかな年金を手に愛してやまないサッカーに身を捧げることを決意したのだ。

成功と挫折の繰り返しの中で 人脈は徐々に築き上げられた

しかし、彼のキャリアはたちまち障害にぶち当たる。1977年、アッロディがユヴェントスを去ったのだ。だが幸いにも、モッジはすぐにローマ会長の顧問としての仕事を始める。そしてシエーナからロベルト・ブルツォを獲得し、最初からうまく具合に成功を収めたのだ。

ブルツォのゴール数は、現在でもトッティに次ぐクラブ史上2位

の記録となっている。だが1979年、モッジの列車は脱線してしまう。ローマ対アスコリ戦の前夜、審判と一緒に食事をしているところを見つかってしまったのだ。ローマがその試合に勝った翌日、アスコリの理事の一人が彼を非難したが、しかしモッジは落ち着き払って、まったく偶然に鉢合わせただけだと答えた。この主張に当時のローマ会長だったデノ・ヴィオーラは納得せず、ただちに彼を解雇。モッジは近所のクラブ、つまりラツィオに慰めを見出したのだ。こうして、新たな移籍が実現し、また新たなスキャンダルが生まれていく。

当時のラツィオにまつわるスキャンダルの中でモッジの名前が浮かび上がることはなかったが、79-80シーズンのラツィオとミランは賭博スキャンダルによってセリエBに降格されている。

それから2年後、モッジは再びトリノに現れる。今度は以前よりも慎重に手を打ち、後にサッ

カー協会会長に就任するトリノ会長ルチアーノ・ニッツォーラ、2005年夏まで協会で審判選定担当者を務めたヒェルルイジ・パイレット、さらに審判員一名を仲間にしてはかりごとを巡らせた。

モッジは人脈を築き続けた。その交際の一部はあまり賢明なものではなかった。1987年5月、彼はチャンピオンチームとなったナポリと契約したが、このクラブの道徳観や慣習が地元のマフィアであるガモツラに感化されていることを知る。モッジは例の有名な猿さながらに「見ざる聞かざる」を通じたと断言している。

とはいえ、今となっては彼の言葉にどれほどの価値を置くべきかは周知の通りだ。

ユヴェントスの中枢に介入するも ついはその悪行は暴かれる羽目だ

しかしマラドーナがアルゼンチンに帰国してしまつとナポリはモッジ

「著名な客を女性の社交係によつててなす」という一貫した計画が考案され実行に移されたという点に関しては疑いの余地はないだろう。結局、モッジは罰金を科せられたのみ。しかしながら、トリノを去らなければならなかった。

1993年、彼はローマに逃げ込むが、フランコ・センシがチームを買い取るとすぐに追い出された。モッジの解雇はセンシ会長が最初に下した決断だった。このような障害にもめげず、モッジは1994年夏にユヴェントスに辿り着く。老貴婦人となっていた当時のユヴェントスは新規巻き返しを図るうとしていた時期で、代表取締役役にジラウドを、スポーツディレクターにベッダガを、そしてゼネラルマネージャーにモッジを雇ったのだ。モッジはすぐにゼネラルディレクターとして移籍も担当するようになった。この三頭体制の下、ユヴェントスは再び名声と成功を手にするようになる。だが、成功には代償

が手腕を振るうには小さすぎるクラブとなったため、1991年にはトリノに戻ることを決め、またすぐに脚光を集めるようになる。彼は当時16歳のガリーナ選手を三人雇っていた。イタリアの法律では選手として雇うには若すぎるためモッジは彼らをトリノ会長ルチアーノ・ニッツォーラの所有する会社のメールボーイとして雇うことにしたのだ。

さらに何よりも、審判との奇妙な関係がまたしても暴露されたのだ。1992年、クラブのある職員から、モッジがUEFAカップのホーム開催の試合に関して贈り物や高価な食事や売春婦で審判を買収したと告発されたのだ。

モッジはこれを否定しなかったがそのコルガールのことをなんと「通訳だ」と思っていたと弁解。しかし確実な証拠がないため、UEFAも検察もこの件の追求を取りやめることに決めたのだ。だが検察官は最終的な報告書の中で次のように書いている。

がつぎものだ。モッジにはその代償を払う覚悟ができていたのだ。ろっかいかなる代償であるうとだ。

数年前に明るみに出たドーピングスキャンダルに続き、買収と八百長のスキャンダルが、今明らかになりつつある。この10年の間、老貴婦人は払われるべき敬意をすべて失ってしまったのだ。

もちろんモッジも同じだが、彼の場合はそもそもそれほど多くの敬意など払われていなかったのだから、それほど失望することもない。優れた選手を見つけ出すことで出世の階段を上り始め、試合から不確定要素を取り除くことによつて頂点に辿り着いた男は、間もなく破滅の運命を迎える。

ラッキー・ルチアーノが魔法の杖を失ったのは間違いなく、そのうち刑務所に入ることもなるかもしれない。

そこではきつと、これまでモッジの力になってくれたであろう、マフィアの友人たちが迎えに来てくれるはずだ。